

曹禺「雷雨」の人称代名詞：
言語面からの人物関係の検証

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今井, 敬子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00001109

曹禺「雷雨」の人称代名詞

一言語面からの人物関係の検証一

今 井 敬 子

はじめに

小論は、テキストの中で使用される言語標識を、テキスト全体を視野において位置づけ、そのはたらきの特性をテキストの流れの中で分析することを目的とする。具体的には、曹禺作の戯曲「雷雨」の台詞に見られる人称代名詞（二人称、三人称を中心に）を取り上げ、必要に応じて呼びかけ語も参考にしながら、語用論、談話文法論の観点から考察を加える。そして、テキスト内におけるそれらの標識の使用特性が、劇中の人物関係、人物特性をいかに反映しているか、具体的な人物に即して検証を試みたい。

小論は次のような構成になっている。

1. 主要人物とあらすじ
2. 人称代名詞の使用基準と使用範囲
3. 人物関係の個別検証
 - 3.1 魯侍萍と周朴園
 - 3.2 周繁漪と周萍
 - 3.3 魯四鳳と魯貴、周萍、周冲

なお、引用例は「曹禺文集 第一巻」（中国戯劇出版社 1988）所収の「雷雨」¹⁾から収集している。

1. 主要人物とあらすじ

主要人物は、炭坑を経営する周家の四人の家族とその下僕的一家・魯家の四人の家族である。周家は、主人・朴園（55歳）と妻・繁漪（35歳）、朴園の先妻の生んだ長男・萍（28歳）と、繁漪の生んだ次男の冲（17歳）がいる。朴園は絶対権力をふりまわす暴君的な夫、父である。繁漪と継子の萍は不倫の関係にあったが、清算しようとする萍と、執着する繁漪とが対立している。冲は純真で美しい夢の中に生きる人物である。

一方の魯家は、主人・魯貴（48歳）と妻・侍萍（47歳）、侍萍の連れ子である息子・大海（27歳）、魯貴と侍萍の娘・四鳳（18歳）の四人だが、魯貴は周家の下僕で、侍萍は家族を離れてひとり遠方で働き、大海は周家の炭鉱で働く労働運動の指導者、四鳳は周家の下女をしている。四鳳は周家の長男・萍と秘密の恋仲であり、萍の弟・冲からも想いを寄せられている。

30年前、南方の町にあった周家に仕える下女の娘・侍萍（当時は梅侍萍）は、御曹司の朴園と相愛関係になり、ふたりの男児（萍と大海）を生んだが、大海を生んだ直後に捨てられ、追い出された。30年の後、北方の地で、侍萍と朴園がはからずも再会したことから、侍萍が実は萍の生母であること、恋仲の萍と四鳳は同母兄妹であることなど、すべての秘密が明らかになる。衝撃で部屋を飛び出した四鳳と彼女を追った冲は、庭の電線に触れて感電死し、萍はピストル自殺をする。大海は失踪する。子供たちを失った三人の親が後に残され、そのうちの二人——侍萍と繁漪は発狂する。

四幕構成のドラマは、ある夏の日の朝から翌日の未明までの短時間のあいだに、限られた空間（周家の客間と魯家）において始まり、展開し、終結する。主筋の四幕のほかに、プロローグとエピローグが設けられ、そこでは、時が移って10年後の冬、かつての周家の屋敷が今では教会付属病院に変わり、入院している繁漪と侍萍を、老いた朴園が見舞いに訪れる。

2. 人称代名詞の使用基準と使用範囲

小論では、単数二人称と単数三人称の指示を中心にとりあげる。まず、多用されている二人称の使用から見ていく。

中国語の単数二人称代名詞には、“ni”とその敬語体“nin”の二形態がある²⁾。この両者は、上下・親疎の違いによる対人関係や場面に応じて使い分けられるが、“nin”は、尊敬、あるいは疎遠、“ni”は、親近あるいは軽蔑のニュアンスがあることはよく知られている。

「雷雨」のテキストのはじめから終わりまでの流れの中で、使用されている二人称代名詞を、指示者（発話者）と指示対象（二人称代名詞の場合はすなわち聞き手）の関係ごとに調べると、次のように大別できる。

(1) “ni”あるいは“nin”の専用（基本的に一方だけを使用）

(2) “ni”と“nin”の両用

(2) について、同一場面における一連の会話を単位にして調査すると、つぎのように分けられる。

(2-1) 始まりでは“ni”あるいは“nin”の一方を使い、会話の進行(時間的経過)に従って、別の一方の使用に移行する。

(2-2) “ni”と“nin”の両者を一連の会話の中で交互に、あるいは移行のかたちで使用する。

(2-3) ある会話(場面)内では“ni”あるいは“nin”の一方のみ、別の会話(場面)ではもう一方のみを使用。

(1)のような一方のみの使用は、“ni”については多くの人物関係について広く見られるが、“nin”のみの使用は限られている。その代表は子→親(指示者→指示対象)の場合である。たとえば、周家では、兄弟ともに両親を“nin”で指示し、魯家では兄妹ともに母を“nin”で指示する³⁾。父の魯貴のみ“ni”も使用される。従って、子→親の場合は“nin”の使用が標準的で、魯貴の場合はこの基準から逸脱しているものと理解できる。魯貴に対しては、息子の大海は終始“ni”で指示する。これは大海が、周家に卑屈に仕える継父の魯貴を軽蔑しているために、目上の尊敬すべき対象を指示する“nin”をつかわず、“ni”で指示するものと考えられる。又、娘の四鳳は、“nin”を基本にしながら“ni”を併用する。このケースは(2-2)に分類される。

“nin”の専用に準ずると考えられるのが、下僕→主人の場合である。その状況はやや複雑で、たとえば魯貴は、紫漪、萍、冲を“nin”で指示する。四鳳は、紫漪には“nin”を、冲には、“ni”で指示する³⁾。萍に対しては、両者を使い分けているため(2-3)に分類される。このように、魯貴と四鳳とは使用状況に違いがあることは、ふたりが同じ下僕的身であっても、実際にはその立場が違っていることがうかがえる。

周家の主人・朴園は、人称代名詞で指示されることの最も少ない人物である。魯貴、四鳳は、代名詞を使わずに“老爺”で指示するが、これは“nin”の使用に関して敬語上の制約がはたらいっているのであろう。しかし、第三幕で、名前を特定されていない下僕が“nin”で指示していることを考えあわせると、下僕→主人は“nin”が標準的と理解してもよいかもしれない。

(2)は(1)とはちがって限定された関係にだけ見られる。

(2-1)のタイプは、時間的経過にしたがって、指示者と指示対象の上下・親疎関係が変わっていくという特徴がある。顕著なケースは、侍萍→朴園で、ふたりがはからずも再会したとき、朴園に向かって、侍萍が徐々に素性を明かしていく過程に、“nin”から“ni”へのはっきりとした推移が見られる。また、周萍→侍萍は、初対面では“ni”を、後に四鳳の母であると知ってから“nin”

を使う。こちらは一連の会話の中での移行ではないが、このタイプに準ずるものとして分類できる。

(2-2) は、指示者と指示対象の関係は単一で固定しているが、心理的な距離、発話効果などが要因となっているタイプである。“ni”と“nin”が同等の頻度で使用されるケースはなく、両者のどちらかが使用度が高い。顕著なケースは四鳳→魯貴で、“nin”が基本であるが、“ni”が一定程度(12件。この他、“nin 老人家”が2件)使用されている。四鳳→周冲は“ni”が基本だが、下女→主人の関係を強調する効果をねらった“nin”が2件見られる。この両ケースは、“nin”の連鎖の中に、時に“ni”が入り込むというかたちである。また、大海が、労働交渉のために朴園に接見する場面では、冒頭のあいさつとそれに準ずる短い会話だけが“nin”で、その後は“ni”に切り替わる。こちらは一方からもう一方への移行のかたちである。

(2-3) は、指示者と指示対象が複数の関係をもつ場合に、その使い分けに応じて“ni”と“nin”が交替して使用されるタイプである。典型的なケースは、周萍→蘩漪で、ふたりだけの場面(かつての愛人関係)では“ni”を、第三者の面前(母子の関係)では“nin”を使用する。また、四鳳→周萍は、会話場面のほとんどがふたりだけの場面であって“ni”が使用されているため、“ni”の専用のように見えるが、実は、第三者の同席する場面で“nin”を使用している例が一例あるため、両用して使い分けられていると考えてよいだろう。

単数三人称代名詞“ta”⁵⁾は、話者の眼前にいる人物を指示する場合(現場指示)と発話の中に現れる人物を指示する場合(文脈指示)がある。また、二人称の場合と違って、指示対象と聞き手が別の人物であり、聞き手の立場が“ta”の選択使用に影響する場合がある。

敬語上の使用制約が“ta”にも認められることは、木村(1990)に詳しいが、「雷雨」では、現場指示の“ta”は、用例が少ないため見極めがむずかしい。文脈指示の場合は、用例が不十分ではあるがそれでも、発話の相手(聞き手)の影響に関して一定の傾向が見られる。すなわち、子→親は、“ta”で指示している。下僕→主人は、魯貴と四鳳が、朴園に対して“ta”の使用を避け“大少爺”を使っている。一方、蘩漪や周萍、周冲に対しては、聞き手が発話者寄り(魯家の家族など)のときは“ta”で指示していて、指示対象寄り(周家の家族)のときは、“ta”を使いにくいという傾向が見られる。

これとは別に、テキストの流れの中で“ta”を見ると、次の二点の用法におい

て顕著な特徴が見られる。

- (3) 文脈指示の場合、先行詞が前後の文脈内にないもの、あるいは、先行詞があってもわかりにくいものがある。この用法は全体として多くはないが、紫漪が指示者である例が最多である。
- (4) “ta”を使用して、三人称以外（一人称、二人称）を指示するような指示の変換がみられる。全体の数はわずかなが、紫漪に関するものが最多である。

以上の全般的状況に基づき次節では、上の分類の(2)、(3)、(4)について、主要人物の中の侍萍、紫漪そして四鳳の三女性に関心の焦点を置き、具体例を挙げながら分析を進める。

3. 人物関係の個別検証

3.1 魯侍萍と周朴園、周萍

魯侍萍の発話には、会話の進行にともなって人物関係が移り変わる場合の、二人称代名詞の典型的な用法が見られる。

「雷雨」には、三人の侍萍がいる。むかし周家の下女であった梅侍萍、周萍の「亡くなった」生母の侍萍、そして魯侍萍である。第一幕の最後の部分で、周萍の亡母・侍萍について、僕園と息子の萍の比較的長い会話があり、三人の侍萍の中で、まずは彼女にスポットライトが当てられる。僕園は、亡き妻・侍萍の写真を部屋にかざり、彼女の生前の習慣に従って夏でも部屋の窓を閉め切り、亡母に恥ずかしくない生活をするように、と自堕落な生活に苦しむ息子・萍にさとするのである。

魯侍萍は、八人の主要人物の中で最も遅く、第二幕になって初めて登場するが、彼女の出現が糸口になって、すべての秘密が発覚し、終局の破滅へと進むことになる。

彼女は、周紫漪と呼ばれて周家の屋敷を訪ねるというかたちで登場する。紫漪が、息子・沖の四鳳への純真な想いに危険を感じて（周萍と四鳳の関係を断とうとする気持ちもあり）、四鳳を解雇しようとし、母親の侍萍にそれをいいふくめるべく呼び寄せたのである。

以前は南方の無錫の地にあった周家だが、その後、ここ北方の地に居を移している。朴園に捨てられてから、あらゆる辛酸をなめ尽くした末に、今では魯貴の妻となっている侍萍は、夫と娘の働く屋敷が当の周家とは知らずに訪れる。

が、昔のままに保存された部屋の様子や、簞笥の上の「周家の当主の先妻であり、長男の亡母」の写真を見て、かつて仕えた周家であることを知る。

その後侍萍は、部屋を出る機会を逸し、入ってきた朴園とはからずも対面するはめになってしまう。最初は新来の下女と思って何も気づかなかった朴園だが、侍萍のものごしと無錫なまりの口調に何かを感じ取る。こうして始まるふたりの対話は、前半のクライマックスである。

朴園にたずねられて侍萍は無錫で育ったと答え、対話が始まる。最初は“老爺”（旦那さま）と朴園を指示し、人称代名詞はまだ使われない。

朴：（沈思）三十多年前、是的、很遠啦、我想想、我大概是二十多歲的時候。那時候我還在無錫呢。（物思いに沈んで）30年前、そう、ずいぶん昔だ、たしか、わしは20才といくつかの頃だったろう、あの頃はまだ無錫にいた。

侍：老爺⁹是那個地方的人？ 旦那さまは無錫のかたでいらっしゃいますか。2-99

侍萍は、顔を会わせた当初から、相手が朴園であるとわかっていて、たくみに会話を続けていく。朴園が、むかし無錫で梅という娘の投身自殺があったことに言及すると、侍萍は四鳳の母だと名乗りながら、「梅という娘」を“ta”で指示し、町中でうわさとなった彼女の苦難の半生を語り聞かせるのである。

この間に、“老爺”での指示が3件あり、そのあと初めて“nin”が使われる。最初は次の例のように、“nin”のみの指示よりも丁寧度の高い“老爺、nin・・・”というパターンで使われている。侍萍が、梅という娘が実はまだ生きていること、しかもこの地にいることを告げると：

朴：甚麼？ 她就在這兒。此地？（なに、あれはここにいるのか、この地に）

侍：嗯、就在此地。（ええ、この地です）

朴：哦！（ああ！）

侍：老爺、您想見一見她呢。（旦那さま、お会いになりますか）

朴：不、不、謝謝你。（いや、いいよ、ありがとう）2-102

このあと、同一会話中に“老爺”と“nin”が併用されるかたちを中心に、“nin”が徐々に使用を増す（この間に“老爺”3件、“nin”2件）。

やがて侍萍は、かつて彼女が刺繍をほどこした朴園のシャツに言及し、朴園はついに、目の前の女が侍萍であると気づく。ここから、侍萍の指示のしかたは、“ni”に切り替わる。

朴：（徐徐立起）哦、你、你、你是——（やおら立ち上がり）お、お前、お前は—

侍：我是從前伺候過老爺的下人。わたしはむかし旦那さまにお仕えした下女でございます。

朴：哦、侍萍！（低声）怎麼是你？ お、シーピン！（声を落して）どうしてお前が？

侍：你自然想不到、侍萍的相貌有一天也会老得連你都不認識了。侍萍の容色が、いつの日にか見わけがつかないほどに衰えようなどとは、あなたは思ってもみなかったことでしょう。

朴：你——侍萍？ お前は——シーピンなのか？
（思わず簞笥の上の写真と魯媽を見比べる）

侍：朴園、你找侍萍嗎？ 侍萍在這兒。プーユエン、あなたはシーピンを探しているんでしょう？ シーピンはここにいますわ。2-103

最初はおずおずと朴園の質問に答えるだけであったが、彼が切に欲している情報を少しずつ提供しながら、徐々に会話を主導するようになり、ついには自ら素性を明かすのである。このあと、侍萍は一連のふたりの会話の中で、ずっと“ni”で朴園を指示し続ける。

以上のように、“老爺”→“老爺と“nin”の混在”→“nin”→“ni”と、一連の会話の流れの中で指示のしかたが推移する。“老爺”から“ni”に至るまでの過程は、現在の魯侍萍から30年前の梅侍萍へと時をさかのぼって、朴園との関係を規定し直していく過程である。侍萍と朴園はそのほかの人物と違って、ト書きにおいて人物特性が詳説されることなく、「もっぱら対話と独白によって来歴や心理が明かされる」⁷⁾ため、第二幕のこの部分の一連の対話は、情報量がきわめて多い。

侍萍は、二度とふたたび訪れないことを朴園に約して別れる。ところがその後、はからずもまたもや朴園と顔を会わすことになり、そのときには“nin”で指示をする。第四幕の終盤で、出発しようとする周萍と四鳳を繁漪が遮り、夫の朴園を呼ぶ場面である。階上から降りてきた朴園は、二度と戻らないと言ったはずの侍萍を見て、思わず彼女の名を口走ってしまう。こうして、四鳳の母が実は周萍の生母であることが、いあわせた劇中人物全員の前に明らかになる。第四幕の山場である。このとき侍萍は、萍の生母であることを否定しようとして、「旦那様の朴園」を“nin”を使って指示する。彼女はすでに、何も知らない

四鳳と周萍を行かせることに同意している。今さら真実を明かすことはできない：

朴：（明白地）怎麼——（向侍萍）侍萍、你到底還是回来了。（事態をさとして）どうして・・（侍萍に向かって）侍萍、おまえはやっぱり戻ってきたんだな。

繁：（惊）甚麼？（驚いて）なんですか？

侍：（慌）不、不、您弄錯了。（あわてて）いえ、いいえ、おまちがえです。

4-198

彼女の必死の否定にもかかわらず、すべては明らかになる。その結果、四鳳と、彼女を追った冲は、漏電している電線に触れて死に、大海は失踪する。次は、大海を追うように命じたあとの朴園の台詞である：

朴：（哀傷地）我丟了一個兒子、不能再丟第二個了。（嘆いて）息子をひとり失って、ふたりまで失うなんてことはできない。

侍：都去吧！ 讓他去了也好、我知道這孩子。他恨你、我知道他不会回来見你的。みんな行っておしまい！ 行かせればいいのよ。あの子は、あなたを恨んでいます。あなたに会いに戻ってくるはずなんてないわ。

4-203

ここで、侍萍は再び朴園を“ni”で指示している。この直後に、周萍の銃声が聞こえ、劇は終わる。

10年後を描くプロローグとエピローグを見ると、ふたりはずっと、失踪した大海の帰りを待ち続けてきたことがわかる。もし大海が帰ってきたら、新しい物語が始まるのであろうが、エピローグの朴園の台詞では、その可能性は皆無に近いようだ。朴園と侍萍は、劇物語の根源にいる男女のペアであり、すべての事件がふたりをそもその起点にして発生した。エピローグではそのふたりが揃って姿をあらわし、劇をしめくくるのである。

周萍が初めて魯侍萍と会うのは、周家に交渉に来た大海が、朴園の措置に怒って暴れ出し、喧嘩沙汰になったときである。侍萍は思わず周萍の前に駆け寄り、泣きながら大海をかばう。侍萍は、目の前の青年が周萍であることを、すでに朴園から聞かされているが、周萍にとっては、突然見知らぬ女が飛び出してきたのである：

萍：你是誰？（あんたは誰ですか）

侍：我是你的——你打的這個人的媽。（あなたの・・あなたがなぐったこの

子の母ですよ) 2-112

その後、四鳳の母であるとわかると、“魯奶奶”(魯おばさん)と呼びかけ、“nin”を使うようになる。

萍：魯奶奶、請您相信我、我一定好好地待她、我們現在決定就走。

(魯おばさん、ぼくを信用してください、きっと四鳳をだいにします、ぼくたちいま出発することにしました)。4-188

ところが、周萍はこの後、侍萍が亡くなったはずの生母だと知ることになる。侍萍は彼にとって、見知らぬ女→大海の母→四鳳の母→自分の生母というふうに、彼との関係を変えていく。周萍にとっては、想像の中で美化された母と実際の母(侍萍)の姿とはあまりにかけ離れ、しかも恋人の四鳳の母でもあるとは、耐え難い現実であった。周萍をとりまく女は、繁漪と四鳳の二人だけではなく、幻想の中の実母もそのひとりである。最後にその実母がもたらした恐るべき現実と直面した彼は、耐えきれずに自らの生を閉じるのである。

3.2. 周繁漪と周萍

周繁漪は、“ni”と“nin”の使い分けの指示者ではなく、指示対象であり、また、“ta”の用法に関しては際だった特徴が見られる。

周家の長男・萍は、父に対しては常に“nin”で指示するが、母の繁漪には、第三者の面前で“nin”を、ふたりだけの場合は“ni”を、という画然とした使い分けをする。彼が繁漪を“nin”で指示するのは、母として扱うべき公の場面においてであり、“ni”を使い、ファンイ(繁漪)と呼ぶ(2-77)のは、かつての愛人で今は重荷でしかない繁漪と相対するときである。

次は、繁漪と周冲の話しているところへ周萍が入ってきた場面での会話である：

冲：哥哥。にいさん。

萍：你在這兒。おまえ、ここにいたのか。

繁：(覺得沒有理她) 萍！(無視されたと思って) ピン！

萍：哦？(低了頭、又抬起) 您——您也在這兒。え？(うつむき、再び顔を上げて) あなた・・・あなたもここでしたか 1-56

周萍がきわめて意識的に、繁漪を“母親”と呼ぶ場面がある。父と母を避けて通り過ぎようとした萍を、朴園が呼び止める場面である。萍は、生き直すべく周家を離れようとしている：

朴：你不是明天早車走嗎？ あしたの朝早い汽車で行くんじゃなかったの

か。

萍：我忽然想起今天夜晚兩点半有一趟車、我預備現在就走。今晚二時半に汽車があるのを思い出しましたので、今すぐに行くつもりです。

繁：（忽然）現在？（突然に）今すぐ？

萍：嗯。ええ。

繁：（有意義地）心里就這樣急嗎？（意味ありげに）そんなに急いでいるの？

萍：是、母親。はい、おかあさま。4-165

上の例で“母親”と呼んだそのすぐあとで、朴園が退場し、ふたりだけになると、萍は“ni”に切り替えて繁漪を指示する。次の対話の中で、周萍が「ぼくの母」といって指すのは「亡くなった実母」である。

萍：你—（故意惡很地）你自己要走這一条路、我有甚麼亦法？あなたが——（わざといじわるく）あなたが自分で道をみつけるしかない、ぼくはどうしてあげることもできないよ。

繁：（憤怒地）甚麼、你忘記你自己的母親也被你父親氣死的嗎？（憤然と）なんですって、あなたは自分の母が、父のせいでひどい目にあってるのを忘れたの？

萍：（一了百了、更很毒地激惹她）我母親不象你、她懂得愛！她愛她自己的兒子、她没有对不起我父親。（すべて承知というふうに、さらに毒づいて）ぼくの母はあなたみたいじゃないよ、ぼくの母は愛情というものがわかっている、子供を愛しているし、父に申し訳の立たないことなんかしないよ。4-169

繁漪は、朴園の妻、萍と沖の母、萍の愛人という3つの立場の中で、沖の母であることを除くと、ほかはすべて破綻同然の状態にある。前妻にこだわり続ける夫の朴園、亡母を美化してやまない周萍、この自己完結したトライアングルから繁漪はひとり疎外されている。それに、夫からは精神病扱いにされ、愛人であった周萍からも今では疎まれている。「朴園は私に沖を生ませただけ」（2-77）、「父子二代にわたって騙され侮辱された」（2-88）のであり、彼女はまことに孤独で悲惨な生存を続けている。

繁漪は、最後には、周萍との関係をすべてさらけだす。周萍は、そうした彼女を、それまでとは違って、第三者の面前であっても“ni”で指示するようになる。

次の会話は、劇の終盤で、周萍が四鳳を連れて家を出ようとしたとき、繁漪

がその前に立ちふさがり場面である。彼女は、四鳳に想いを寄せている息子の沖にこの事態を見せつけるべく、沖を呼ぶ。現れた弟の沖を見ると、周萍は繁漪に向かって：

萍：（焦燥、向繁漪）你這是干甚麼？（あせって、繁漪に対して）これはどうしようっていうんだ？

繁：（嘲弄地）我叫你弟弟来跟你們送行。（嘲弄して）あなたの弟にお見送りさせますわ。

萍：（気憤）你真卑——（憤慨して）あんたはなんて、卑劣・・・4-193

繁漪はさらに朴園を呼び、その結果、朴園の口からすべてが明らかになる。繁漪は、いあわせた劇中人物みんなの前で、最後の破滅に至る引き金をひく役割を担ってしまったのである。

以上のように、繁漪が指示者ではなく、指示対象として、しかも彼女が執着する周萍による“ni”、“nin”の使いわけの対象となっているのは、あたかも、ひたすら受け身で、自己分裂を強いられた存在であるかのようなのだが、一方で彼女は、“ta”の使用においてその使用者として顕著な特徴を見せる。

「雷雨」には、“ta”の文脈指示の用例の中に、先行詞なしにいきなり指示したり、あるいは、先行詞がさがしにくいために、聞き手が指示対象を特定できないものが見られる。このような“ta”の用例が6件見られるが、その使用者で最多なのが繁漪（3件）である。次の例では、先行詞と、“ta”の指示対象とが結びつきにくい、わかりにくくなっている。

繁：你父親干甚麼呢？ おとうさん（魯貴）は何をしているの

鳳：大概跟老爺買檀香去啦。——他說、他問太太的病。旦那さまの白檀を買いにまいったのでしょうか。父が奥様のおかげんをおたずねするようにとのことでした。

繁：他倒是惦记着我。（停一下忽然）他現在還沒起來麼？ あの人は私のことを心配してくれているのね。（ちょっとしてから突然）あの人はまだ起きないの。

鳳：誰？ だれです？

繁：（沒有想到四鳳這樣問、忙收斂一下）嗯、——自然是大少爺。（四鳳にこんなふうに聞かれるとは思いがけなく、さっと表情をひきしめて）ん——もちろん上の坊ちゃまのことですよ）1-42

問題の“ta”は、引用例よりさらに前の文脈に先行詞“大少爺”があるが、その後、他の人物（魯貴）が話題人物として介在し、しかも、直前の文で“ta”で

指示されているため、それぞれ違った人物を指すふたつの“ta”が近接してしまい、指示対象がわかりにくくなっている。

上の対話での話題は、この後、“大少爺”から四鳳に移り、さらに“老爺”に及び、その後、繁漪は、突如として再び“ta”で“大少爺”を指す。次の引用箇所は、“老爺”を話題にしている部分の途中からである：

鳳：我怕老爺念經喫素、不喜歡我們伺候他、聽說老爺一向是討厭女人家的。旦那さまはお經と精進食でお過ごしで、わたしもののお世話がお嫌いだと思ひまして、旦那様はずっと、女がおきらいでいらっしゃるとお聞きしましたが。

繁：哦、（看四鳳、想着自己的經歷）嗯、（低語）難說的很。（忽而抬起頭來、眼睛張開）這麼說、他在這幾天就走、究竟到甚麼地方去呢？まあ、（四鳳を見て、自分のこれまでを思い）ん、（小さい声で）なんといったらよいかむずかしいわね。（突然、顔をあげて、目を見開き）それにしても、あの人がここ数日いつも出かけていたのは、結局どこへ行っていたの？）

鳳：（胆怯地）您說的是大少爺？（こわごと）奥様がおっしゃるのは、上の坊ちゃまのことでしょうか。1-43

このように、一連の対話の中で、指示対象の特定しにくい“ta”を繰り返し使っている。周萍への関心とこだわり、それに、対話の相手の四鳳へのこだわりが重なって、明示的な指示を妨げているのであろう。

次の例では、眼前にいない人物を先行詞なしに、いきなり“ta”で指している。食堂から出てきた繁漪が突然、周萍に言う：

繁：他上哪兒去了？ あの人はどこへいったの。

萍：（莫明其妙）誰？（わけがわからず）だれです。

繁：你父親。あなたのおとうさまよ。2-75

次は周萍に向かって言う台詞だが、“ta”の先行詞“失望的女人”は話者の繁漪を指していて、一人称が使われるべきところに“ta”が使われている。

繁：（冷笑）小心、小心！ 你不要把一個失望的女人逼得太很了、她是甚麼事都做得出來的。（冷笑して）あぶない、あぶない！ 失望した女をあまりに追いつめちゃいけないわ。彼女は何だってやっちゃいますからね。2-117

自身を“ta”で指示する例をもうひとつ。萍、侍萍、四鳳の面前で、息子の冲に向かっていう台詞である：

繫：・・・略・・・你的母親早死了、早叫你父親死死了、悶死了。現在我不是你的母親。她是見着周萍又活了的女人、(不顧一切地)她也是要一個男人真愛她、要真真活着的女人！おまえのお母さんは死んじやったのよ。お父さんにおしつぶされて悶え死んだの。今では私はおまえの母親じゃない。彼女は萍に会って生き返った女、(すべてを顧みずに)彼女は心底愛してくれる男の人が必要だし、生き生きと暮したい女なのよ！ 4-196

次は、上の台詞にすぐに続くもので、萍に向かつて言う台詞の後半部分だが、聞き手の萍を“ta”で指示している。上の例の、自身を指す“ta”と対応して使われているものと考えられる：

繫：・・・略・・・你的父親只叫我生了冲了、然而我的心、我這個人還是我的。(指萍)就只有他才要了我整個的人、可是他現在不要我、又不要我了。あなたの父親は私にただ冲を生ませてだけ、でも私の心は、私はやはり私。(萍を指して)彼だけが私をまるごと求めてくれた、でも今では彼は私をいらなくなつた、いらなくなつたのよ。4-196

二人称で指示すべき対象を、三人称で指している例をさらに一つ挙げる。周萍が、繫漪と周冲の話しに加わらず、部屋に下がろうとする場面である：

冲：不、哥哥、母親說好久不見你。你不願意一齊坐一坐、談談麼？ だめだよ、兄さん、おかあさんが、しばらく兄さんと会ってないって言ってるよ。いっしょにちょっと坐って、話しをしない？

繫：你看、你讓哥哥歇一歇、他願意一個人坐着的。ほら、お兄さんに休ませてあげなさい。お兄さんはひとりでいたいよ。

萍：(有些煩) 那也不見得、我總怕父親回來、您很忙、所以——(煩わしそうに) そうでもないですよ。お父さんがかえってくるんじゃないかと思って、あなたも忙しいでしょうし、だから——

冲：你不知道母親病了麼？ 兄さんは、母さんが病気だってこと知らないの？

繫：你哥哥怎麼会把我的病放在心上？ おまえのお兄さんが、私の病気を氣にかけたりするもんですか。1-56

上の例で、周萍は繫漪を“nin”で指示しているのに対し、繫漪は周冲を聞き手にして、“ni 哥哥”、“他”を使い、周萍が第三者であるかのように指している。

以上のように、対象が不明示であったり、直接指示を回避するような“ta”の使用からは、繫漪の他者とのコミュニケーションのありかたの特徴がうかがえ

るし、他者に向かってあらわに棘を出しがちな彼女の性格の側面が表れていると言えよう。

曹禺は、繁漪について、極端、矛盾といった特徴を備えた最も「雷雨的な」人物形象であると述べている（「雷雨」序）が、その特性は、上の諸例に見られる繁漪に通じるものである。

プロローグとエピローグでは、老いた朴園が入院している繁漪と侍萍を見舞いにくる。プロローグで、朴園はうっかり侍萍の病室のほうへ歩いていってしまい、教会病院の尼僧に、「奥様の病室は二階ですよ。」とたしなめられる場面がある。エピローグでは、大海を待ちわびて病室から出てきた侍萍に、朴園が呼びかける場面がある。ところが、ひとり繁漪のみは、大声で暴れ回る、手のつけられない病人であるためか、舞台には一切姿を見せない。朴園の侍萍に対する関心に引き比べ、繁漪はここでもなお十分に顧みられずにいると見てとれるのである。

3.3 魯四鳳と魯貴、周萍、周冲

魯四鳳の発話には、心理的な要因による使い分け、役割・立場の違いによる使い分けの典型例が見られる。

四鳳の父・魯貴は、食欲で抜け目めのない下僕であるが、同じ周家に女中として働く娘の四鳳が周萍と秘密の恋仲であることを知っていて、それをほのめかしては小遣いをせびり取り、酒、賭博に使っている。

四鳳はそうした父を基本的には“nin”で指示するが、“ni”も使う（12件見られ、そのうち10件が主語の位置にある）。また、わずかであるが、“nin”よりさらに敬語性の高い“nin 老人家”も使う（2件）。次の例では、一連の会話の中で、“nin 老人家”→“nin”→“ni”と指示のしかたが変化する。

貴：（着急）鳳兒、你這孩子是甚 me 心事？你可是我的親生孩子。

（あせって）フォン、なんて心がけだ？お前は俺の実の娘だぞ。

鳳：（嘲笑地）親生的女兒也沒有法子把自己売了、替您老人家還賭賬啊？

（あざ笑って）実の娘がしかたなく身を売っているのに、おとうさんに代わって賭博の借金を返済しろってわけですか？

貴：（嚴重地）孩子、你可放明白点、你媽疼你、只在嘴上、我可是把你的甚麼要緊的事情、都处处替你想。（いかめしく）フォンよ、わかってくれ、母さんがお前を可愛がるのは口先だけのことさ、だが、この俺はお前の大切なことは、どんなことだって親身になってやってるんだぞ。

鳳：（明白地、但是不知他鬧的甚麼把戲）您心里又要說甚麼？（わかったようすで、しかし、父が何をたくらんでいるかはわからず）まだ何か言いたいんですか。

貴：（停一停、四面望了一望、更近地逼着四鳳、佯笑）我說、大少爺常跟我提過你、大少爺、他說——（話をやめ、あたりを見まわしてから、四鳳にいつそう近づいて、作り笑い）あのな、上の坊ちゃまがいつも俺に向かってお前のことを話題になさってな、坊ちゃまが言うには—

鳳：（管不住自己）大少爺、大少爺、你瘋了！（おさえきれずに）上の坊ちゃま、上の坊ちゃまって、おとうさん、おかしくなったんじゃないの！ 1-24

四鳳は父を嫌い、耐え難く思っているが、全く父を相手にしない兄の大海とは違って、「どうであろうとやはり自分の父親である」（1-28）という認識で父を受け入れているため、なだめすかしたり、時には強硬な態度に出たり、様々なストラテジーを駆使して父に対応している。¹⁰⁾ 上の例の後では、再び“nin”に戻るのだが、父との間のそのときどきの心理的距離の変化に応じて、人称指示のしかたも調節されるのである。

四鳳と魯貴の対話には、たとえば次例のように、周萍を“ta”で暗に指す用法がいくつか見られる。

貴：（笑、掩飾自己）你看、你看、你又那樣。急、急、急甚麼？我不跟你^他要錢。喂、我說、我說的是——（低声）他——不是也不斷地塞給你錢花麼？（笑って、本心をかくして）ほれ、ほれ、またそんなふうにする。なに、なにを、なにを怒ってるんだ？ 俺はお前から金をもらおうとしてるんじゃない。おい、俺が言ってるのはだな——（小声で）あの人は——お前に欠かさずお金をくださるんじゃないのか？

鳳：（驚訝地）他？誰呀？（おどろいて）あの人？誰のこと？

貴：（索性說出来）大少爺。（思い切って言う）上の坊ちゃまだよ。

鳳：（紅臉、声略高、走到魯貴面前）誰說大少爺給我錢？爸爸、您別又窮瘋了、胡說亂道的。（顔を赤くして声はうわずり、魯貴の前に来て）上の坊ちゃまが私にお金を下さるなんて、誰がいったのよ。おとうさん、お金に困っているからって、めちゃくちゃなこと言わないでよ。1-19

魯貴は上の発話の中で、“大少爺”（周萍）を先行詞なしに“ta”で指示している。“大少爺”と四鳳との特別な関係をほのめかすために、故意にあいまいに指

し示しているのである。

次の例では、魯貴が、男女の“鬼”（幽霊）が出た話をしているが、“ta”の用法に注目したい。

鳳：鬼麼？甚麼様？（停一下、魯貴四面望一望）誰？ ゆうれい？どんなふうな？（しばらく魯貴の周囲を見回して）だれだったの？

貴：我這才看見那個女鬼呀、（回頭低声）——是我們的太太。俺はたしかに女の幽霊を見たんだ（振り返って、小声で）——奥様だよ。

鳳：太太？——那個男的呢？ おくさま？——男のほうは？

貴：那個男鬼、你別怕、——就是大少爺。男の幽霊はな、驚くなよ、——上の坊ちゃまだった。

鳳：他？ あの人？

貴：就是他、他同他的後娘就在這屋子里鬧鬼呢。あの人だよ。あの人義理の母親といっしょの部屋で幽霊になって出たのさ。1-34

「男女の幽霊」は鰲漪と周萍の秘密の関係を暗に示している。四鳳は、“女鬼”が“太太”だと聞かされると、“太太”という語を反復して確認しているが、“男鬼”が“大少爺”だと聞かされたときは、“大少爺”という語を繰り返さずに、“ta”を使って応じている、というアンバランスが見られる。この“ta”は、直前に先行詞“大少爺”があるので、文脈指示の通常の用法のようにも見えるが、むしろ、無防備な四鳳が思わず、“ta”と指示したことによって、“大少爺”との特別な関係を自ら露呈してしまったものと理解できよう。

周家の下女としての四鳳は、“太太”（奥様）の鰲漪には“nin”を使うが（“老爺”（旦那様）の朴園とは会話もわずかなため、指示する場面は見られない）、子息の周萍と周冲に対しては、“ni”を常用している。これは、徹底して下僕らしい振る舞いの見られる父の魯貴が周萍、周冲のどちらにも、常に“nin”を使うのと、対照的である。

四鳳は、周萍とは人目を忍ぶ恋仲であり、ふたりは、主人と下女、恋仲という二重の関係にある。関係の二重性は、第三者の前では周萍を“大少爺”と呼び、ふたりだけのときは“ピン（萍）”と呼ぶという呼び分けをもたらしている。しかし、二人称代名詞の使用では、わずかな例を除いてほとんど“ni”が使われている。というのも、四鳳と周萍の会話場面は、恋愛関係にあるふたりだけの場面がほとんどなため、“ni”の使用が際だっているのである。

第三者の面前での会話で、“nin”が使われている例がひとつだけある。周家の

屋敷に着いた母の侍萍を出迎えに行くとき、「お母さんによろしくね」（「四鳳、見着你媽、跟我問問好。」）と周萍に言われて、「ありがとうございます、また、あとで」（「謝謝您、回頭見。」）（2-74）と答える簡単な応答のときである。母の到着を知らせに来た魯貴が面前にいたことが、「nin」を選択させていると考えられる。この例から見ても、四鳳は「ni」と「nin」を使い分けていると推察できるが、「ni」がほとんど常用されている状況が、彼女の立場を特徴づけている。¹¹⁾

四鳳が周家から解雇され、周萍が明日炭坑へ行ってしまうというその前の晩、周萍はむりやりに四鳳に会いに魯家を訪ねる。彼を拒んで家に入れまいとする四鳳ともみあう場面がある。ふたりだけの場面である。執拗に帰ろうとしない周萍に向かって、四鳳は、ふだん「ピン（萍）」と名前を呼んでいるのに反して、「大少爺」とよびかけ、ふたりの立場の違いを気づかせようとする。

鳳：（苦痛地）阿、大少爺、這兒不是你的公館、你餓了我吧。（苦しげに）あ、坊ちゃま、ここはお屋敷じゃありません、許してくださいな。3-152

鳳：（哀訴地）哦、大少爺、你別再纏我好不好？（哀願して）ああ、坊ちゃま、もう私にまとわりつかないでください。3-153

この二ヶ所でのみ四鳳は「大少爺」とよびかけるが、それでもなお、「nin」は使わずに、「ni」で通している。

四鳳が、第三者の面前で周萍を指示する場面がもうひとつだけある。終盤近く、兄の大海の理解を得て、ふたりですぐに家を出て、再出発しようとする。母の侍萍は、四鳳と周萍が同母兄妹であることを知っていながら言い出せないまま、ひたすらふたりに抵抗して行かせまいとする。そのとき、四鳳は胸の中におさめていた事実を告げる。

鳳：萍、我總是瞞着你；也不肯告訴您（乞怜地望着魯媽）媽、您——ピン、わたし、ずっとあなたをだましていたし、おかあさんにも言えなかったけど（すがるように母を見る）おかあさんは・・・4-190

四鳳の発話の中の「ni」は周萍を指し、「nin」は母の侍萍を指している。上の場面では、面前の侍萍と大海には、四鳳と周萍との関係がすでに明かされているので、「ni」を使っているのである。

四鳳は、周萍の弟・周冲を「二少爺」と呼ぶが、同時に「ni」を使う。もっとも、場面に制約があり、第一幕での繫漪、周冲、四鳳の三人の会話では「二少爺」をもっぱら使って人称代名詞を使っていないのは、繫漪が同席しているた

めであろう。しかし、たとえば魯家の成員の面前では、人称代名詞を使い、“ni”を常用する。これは、周冲が平等主義者で、しかも四鳳にプロポーズまでしていることや、四鳳より年下（1歳違い）ということなどが“ni”の選択の要因となっているのであろう。

四鳳が解雇された晩、周冲は母に言われて魯家を訪ねる。在宅していて迎えたのは魯貴と四鳳だが、次例に見られるように、周冲に対して魯貴は“nin”を、四鳳は“ni”を使っている：

貴：二少爺、您先坐下。四鳳、（指円卓）你把那張好椅子拿過來。坊ちゃま、お掛けください。スーフォン、（円卓を指して）そのいい椅子をこっちへ。

冲：（見四鳳不說話）四鳳、怎麼、你不舒服嗎？（四鳳が黙っているのを見て）スーフォン、どうしたの、気分でも悪いの？

鳳：沒有。——（規規矩矩地）二少爺、你到這里來干甚麼？要是太太知道了、你——いいえ、——（行儀正しく）坊ちゃま、なぜここへいらっしゃいましたの。もし、奥様のお耳に入ったら、坊ちゃまは—— 3-134

周冲は、解雇された四鳳を励ますうちに気持ちが高じて、日頃の考えを披露するが、四鳳にとってはむしろ迷惑な発言である。ここで四鳳は、周冲に向かって“nin”を2度使う。これが唯一“nin”が使われる箇所である。

冲：不、你不是個平常的女人、你有力量、你能喫苦、……中略……我討厭我的父親、我們都是被压迫的人、我們是一樣。一いや、君はふつうの女のひととは違うよ、能力があるし、苦勞にもめげないし、……略……ぼくは、父がきらいだ、君もぼくも虐げられている、ぼくたちは同じだよ。

鳳：二少爺、您渴了吧、我跟您倒一杯茶。（站起倒茶）坊ちゃま、のどがかわいたでしょう。お茶をお入れしましょう。（立ち上がってお茶を入れる）

冲：不、不要。いや、けっこうだよ。

鳳：不、讓我再伺候伺候您。いえ、もう一度お仕えさせてくださいね 3-

137

四鳳は日頃から、周冲の一方的な愛情を疎ましく感じている。上の例では、“nin”を使うことによって周冲の過剰な思い入れをかわし、主人と使用人の身分関係を呼び起こさせようとしている。

四鳳は、周家の兄弟のどちらからも愛され、大切にされている。彼女はただの下女とは明らかに違った存在で、一方では周家での快適な立場を享受しながら、同時に、本分をわきまえることを信条とする母の侍萍に知られるのを恐れている。そうした矛盾をよく承知しているのが、父の魯貴と兄の大海である。魯貴は彼女の心理を承知の上で、執拗に周萍を話題にしたがるし、大海は四鳳を評して「周家での華やかな暮らしに惑わされ、貧しい自分の家に今ではなじめなくなっている」(3-140)と言う。周萍を“ni”で指示する場面設定が大多数であることから、そうした四鳳の置かれた立場がよく伝わってくる。

一方で、周萍をめぐる四鳳と三角関係にある蘩漪が、“ni”と“nin”の使い分けの対象になっているのと比べても、ふたりの女性の立場の対照性は歴然としている。

おわりに

小論は、二人称代名詞の選択使用、および三人称代名詞のいくつかの用法を中心に上げ、個別に語用論的な分析を加えながら、これらの人称指示標識がテキストの流れの中でいかに指標として機能しているかを、劇内容との関連の上で分析してみた。もとより、人称代名詞の分析だけからは、限られた結果しか得られないが、複雑な人物関係が、人称指示の用法に反映しているようなケースについては、ある程度の特徴を導き出すことができたと思う。

パラメータを人称指示のみに設定した今回の試みを、複数の言語標識を抽出し、多面的・立体的な分析を試みるための最初のステップとしたい。

<注>

1) 「雷雨」の初版は1934年「文学季刊」一卷三期に載ったもので、1936年文化生活出版社から単行本として刊行された。作者は、新中国成立後に、序幕と尾声(エピローグ)の削除を含めて相当部分の書き直しをしているが、「曹禺文集」は生活文化出版社版に拠るものであり、序幕と尾声を備えていることを含め、書き直し以前の面目を保っている。

2) 小論では、“你”を“ni”、“您”を“nin”とピンインで表記する。以下同様。

3) ただし、子→母のふたつの例、四鳳→侍萍および周冲→蘩漪は、“ni”がそれぞれ2件見られる。

4) ただし、四鳳→周冲は、“nin”が2件見られる。どちらも同一場面で、発話効果をねらった用法である。詳しくは、3-3節参照。

5) 小論では、“他”および“她”を代表して“ta”とピンインで表記する。ただし、必要の場合は漢字表記とし、両者を書き分ける。

6) 引用例の中で問題とする標識については、人称代名詞に、~~~~~を、先行詞や呼びかけ語などの固有名詞、普通名詞に——を付した。また、台詞の後の数字は、幕番号、ページを表す（たとえば、1-11 は第一幕、11 ページ）。なお、日本語では通常、人称代名詞の使用が回避されることが多いため、原文の人称代名詞は必ずしもそのまま訳出せず、たとえば普通名詞の使用、文体の差などの方法によって対応した。引用例文の漢字は、印刷の都合で日本語で通用する漢字に書き換えてある。

7) 白井 (1994) 8 頁。なお、ト書きの充実が「雷雨」の特徴のひとつであり、読む戯曲としての叙述性・文学性が備わっているとの指摘がある。

8) 繁漪以外の例を、指示者→指示対象（聞き手）で表すと、魯貴→周萍（四鳳）、大海→朴園（魯貴と四鳳）、周冲→四鳳の謎の恋人（四鳳）がそれぞれ 1 件である。

9) 牧 (1990) は「雷雨」をキリスト教的悲劇として位置づけ、エピローグとプロローグは、朴園の贖罪が描かれている点で積極的な意味をもつと分析している。

10) 吉村 (1964) には、四鳳が魯貴に向かって投げつける辛辣な言葉の挙例がある。165 頁

11) 同じく曹禺の戯曲「家」（巴金の同名小説の戯曲化 1942 年作）では、1925 年以前という時代設定だが、若主人覚慧と女中の鳴鳳との悲恋が重要なモチーフとなって描かれている。巴金の原作では、鳴鳳は覚慧を“ni”で指示するが、曹禺の戯曲では“nin”で指す。覚慧が次のように言う場面があり、“nin”の選択使用が意識的にされていることがわかる。“鳴鳳、我跟你說過多少次。你為甚麼還是“您”哪、“您”的称呼我呢？”（ミンフォン、君に何度も言っただろう。どうして君は僕のことをいつまでも「あなた様、あなた様」って呼ぶんだい？）（曹禺戯劇集「家」四川文芸出版社、1985 122 頁）。

<参考文献>

- 1) 陳松岑 1986 北京話“你”“您”使用規律初探、「語文研究」第 3 期, 24-31
- 2) 董将星 1986 中国語の対称詞をめぐる、「言語生活」416, 44-50
- 3) 井波律子 1977 「雷雨」論—その原像を求めて—、「金沢大学教養部論集（人

文科学篇)」15、39-55

- 4) 木村英樹 1987 中国語の敬語、「言語」Vol. 16 No. 8, 38-43
- 5) ————1990 漢語第三人称代詞敬語制約現象的考察、「中国語文」第5期, 344-354
- 6) 興水優 1977 中国語における敬語「岩波講座・日本語4・敬語」岩波書店
- 7) 牧陽一 1990 キリスト教的悲劇としての曹禺の「雷雨」「日出」「原野」について、「日本中国学会報」42, 242-257
- 8) 白井啓介 1994「雷雨」の舞台指示—曹禺戯曲研究への一つの模索—、「中国文化」52、漢文学会, 1-12
- 9) 王力 1943-1944 「中国現代語法 下巻」
- 10) 吉村尚子 1964 中国における女性会話の特徴的性格—曹禺の「雷雨」「日出」「北京人」について、「中京大学論叢(教養篇)」5, 147-170
- 11) 張煉強 1982 人称代詞的変換、「中国語文」第3期, 182-185